

原爆神話とその影響

松田はな子

The Myth of the Atomic Bombing

Abstract

This paper examines “the myth of the atomic bombing” in the United States and how it influences American people. Moreover, this paper attempts to find out whether the way of thinking about the atomic bombing has changed from World War II until today.

In 1947 after the war, Henry L. Stimson, the former Secretary of the U.S. Army, published “The Decision to Use the Atomic Bomb” in *Harper’s magazine*, which explained the context of the atomic bombing. The important part of this article is the reason given for America’s use of the atomic bomb against Japan: to end the war early and save many American lives. This theory became the official American government view and was widely proliferated in America as the reason for the bombing. Later, this theory came to be called “the myth of the atomic bombing.” At present, many historians insist that “the myth” has already lost credibility in the face of newly confirmed facts. Regardless, according to a survey by Quinnipiac University in 2009, sixty percent of Americans still think that the bombing was right. From this result, it appears that the influence of “the myth” on the public might be still strong. This paper considers the influence of “the myth” from various viewpoints such as education, controversy and documentary.

Chapter 1 examines the details of the atomic bombing and the process of creating Stimson’s article which led to “the myth of the atomic bombing.” In 1941, America started the development of the atomic bomb. The development advanced steadily and then the American government nearly decided to use the bomb against Japan in 1944. Although the U.S. government knew that the Japanese government was seeking a move toward peace in 1945 by monitoring Japanese communications, the Americans didn’t give Japan a chance to surrender and avoid using the bomb. Subsequently, two bombs were dropped on the cities of Hiroshima and Nagasaki. In 1947, some negative opinions about the bombing appeared. To reduce these doubts, James B. Conant, who was involved in the development of the bomb, asked Stimson to write an article about the bombing. This article is the very start of establishing “the

myth.” The theory that the reason for the bombing is to end the war early and save many American lives is outlined in this article. Many politicians later quoted this theory to justify the bombing. This led to the theory becoming accepted as a factual statement by most of Americans.

Chapter 2 explores the influence of “the myth of the atomic bombing” by analyzing descriptions in American history textbooks. Textbooks from the 1950s to the 2000s are analyzed in this chapter. In the 1950s and the 1960s, the textbooks emphasize that the reason for the bombing is to end the war early and save many American lives. In short, “the myth” is written directly into the textbooks. By contrast, the textbooks from the 1970s to the 2000s don’t mention a decisive reason for the bombing. Some textbooks present questions about the bombing and other reasons for the bombing, such as to reduce the threat of the Soviet Union and to measure its effects on the human body. This study reveals that “the myth” had a great influence in the educational circles in the two decades after the war; however, the description of the bombing in textbooks changed from the 1970s onward with the advance of historical research. The later textbooks don’t force “the myth” on students and give them an opportunity to think about the bombing from various viewpoints.

In order to review how American people react when a reconsideration of “the myth” occurs, Chapter 3 analyzes an Enola Gay exhibition and the surrounding controversy. In the early 1990s, the Smithsonian National Air and Space Museum planned to exhibit a plane called the Enola Gay, which dropped the bomb on Japan, and tell audiences the history of World War II. The organizers also tried to reconsider “the myth” academically by displaying historical materials. However, the exhibition wasn’t held as they planned because of criticism from the Air Force Association, the public and the media. In particular, the Air Force Association attacked the museum for being partial to Japan and overemphasized the damage from the bombing. They insisted on the morality of the bombing by relying “the myth.” Because the group and veterans were respected by the public and had strong influence, many people sided with them and criticized the museum. As a result, the museum bowed to the outside pressure. This outcome demonstrates the influence of the Air Force and how “the myth” remained effective in America.

Chapter 4 considers the outline of Oliver Stone’s documentary, which can be said to be a challenge to “the myth” and examines how American people reacted to the film. Oliver Stone’s documentary *The Untold History of the United States* was broadcast on *Showtime* channel in 2012. In this documentary, Stone presented a large amount of historical materials and concluded that the reason for the bombing was not to

end the war early and save many American lives but to check the power of the Soviet Union. The documentary was highly regarded despite its denial of “the myth.” According to a survey of movie reviews on the internet, some individuals say that all Americans should watch the documentary, and that they also need to learn the true history of the United States. Those who contributed reviews accept the new facts and try to tell young generation the true history of the bombing. This shows that some people who watched the documentary don’t persist in “the myth” and their thinking about the bombing changes little by little.

The study concludes that both the influence of “the myth” and people’s thinking about the bombing changes gradually over time. Moreover, the data suggest that America hasn’t been completely bound by “the myth” since the war ended. Attempts to provide alternate explanations for the bombing in education, the Smithsonian exhibition and the Stone documentary can be treated as a united line of thinking that doesn’t support “the myth.” However, it is necessary to consider whether such gradual change can eventually shift public opinion or not.

序章

1945年8月6日、アメリカの爆撃機エノラ・ゲイによって広島に原子爆弾が投下された。3日後の8月9日には、長崎に二発目の原爆が投下された。その影響で、同年12月末までに広島で約14万人、長崎で約7万人が死亡したとされている。そして戦争終結から2年経った1947年、アメリカの元陸軍長官ヘンリー・スティムソンによって論文「原爆投下の決定」が発表された。日本に対する原爆投下決定に関して説明した論文の主旨は、原爆は戦争を早期に終結させ、100万人以上のアメリカ兵の命を救ったというものであった。この論文で示された早期終戦・人命救済説は、その後、アメリカ政府の公式見解となり、原爆を正当化するために用いられた。これがいわゆる「原爆神話」の始まりである。

「原爆神話」はアメリカ国内で根強く信じられてきたが、平和研究が専門の鹿児島大学教授木村朗（2010年）は、この早期終戦・人命救済説は「新しい確認された事実によって研究者の間ではすでに説得力を失っている（10頁）」と述べている。しかし、2009年のアメリカ・キニピアック大学による世論調査では61%のアメリカ人が原爆投下を支持しており、不支持は22%にとどまった。戦後60年以上経っても半数以上が投下を支持していることから、一般の人々への「原爆神話」の影響力は現在でも大きいと言えるだろう。ではこの「原爆神話」は元々どのような背景のもとつくられたのか。そしてその影響力はどれほど大きいのか。本論文は、アメリカ国内に広く浸透している「原爆神話」の誕生の経緯とその影響を検証する。さらに、人々の神話に対する考え方はどのように変化しているのかを研究する。

原爆投下決定の問題と神話について研究したものの一つとして『暗闘：スターリン、トルーマンと日本降伏』がある。著者の長谷川毅（2006年）は、「原爆神話」は歴史的事実に反すると主張し、日本とアメリカだけでなくソ連の政府高官たちの日記や回顧録、通信の記録などから、当時の各国の思惑を詳細に分析している。その上で、アメリカがポツダム宣言作成からソ連を除外したり、日本に天皇制を保障しなかったのは、ソ連参戦前に原爆を使用し、日本を降伏させるためだったと主張している。また、『広島・長崎への原爆投下再考－日米の視点－』において、著者である木村朗とピーター・カズニック（2010年）は、「原爆神話」は政府によって作られたものであると断定し、投下理由に関しては、戦後世界におけるアメリカの覇権確立とソ連抑止説を説得力のあるものだと位置づけている。さらに、降伏条件に固執していた日本側にも責任があるとして、原爆投下は「日米双方の合同作業」だったという意見を提示している。原爆投下決定の背景を詳細に分析した『原爆投下とトルーマン』においても、著者J・サミュエル・ウォーカー（2008年）は早期終戦・人命救済説を批判し、原爆はソ連の影響力を抑えるために投下されたという説をある程度認めている。しかしそれだけでは不十分であると指摘し、原爆計画の費用の正当化や、真珠湾攻撃への報復、原爆を使用しないという動機が欠けていたことなど、様々な考えが原爆使用へと向かわせたと主張している。このように原爆投下決定の背景、そして神話が作

られたものであるという事実は多くの文献によって明らかにされている。しかし、神話の元になったスティムソン論文を扱う文献は少なく、さらに、戦後から現代に至るまでの神話の影響力は詳しく研究されていない。そこで本論文では、原爆投下決定の事実関係と「原爆神話」誕生の過程を考察し、その後、アメリカの歴史教科書やエノラ・ゲイ展論争、オリバー・ストーン監督によるドキュメンタリー映像を素材にして、神話を持つ影響力と神話に対する考え方に変化がないかを検討する。

第一章では、前述した『原爆投下とトルーマン』などを参考に原爆投下の事実関係と早期終戦・人命救済説誕生に至る過程を考察する。その上で、スティムソン陸軍長官の政治家としての生涯にスポットを当てた中沢志保（2014年）の著書『ヘンリー・スティムソンと「アメリカの世紀」』を参考に、「原爆神話」の元になったスティムソン論文がつけられた背景と、早期終戦・人命救済説がアメリカ国内へ浸透していった過程を明らかにする。

第二章では、戦後の1950年代から2000年代のアメリカの歴史教科書における原爆投下の記述を取り上げる。各年代の歴史教科書を分析した高濱賛（2003年）の『アメリカの歴史教科書が教える日本の戦争』などを参考に、投下理由としてどのような説明がされているのか、また、記述に変化がないかを検証した上で、教育界における神話の影響力を明らかにする。

第三章では、アメリカのスミソニアン博物館が、原爆投下に関する展覧会を企画した際に巻き起こったエノラ・ゲイ展論争を扱う。論争を追跡したNHK取材班（1996年）の『アメリカの中の原爆論争』などを参考に、博物館による「原爆神話」再考の動きに対して、一般の人々やメディアがどのように反応したかを検証し、神話を持つ影響力を明らかにする。

第四章では、神話を否定したアメリカの映画監督オリバー・ストーン制作のドキュメンタリーを考察する。ドキュメンタリーの鑑賞を通して概要を明らかにした上で、インターネット上に投稿されたレビューを参考に、一般の人々やメディアにどのように受け入れられたかを検証する。そこから、第二章、第三章と同様に神話の優位性と人々の神話に対する考え方に変化がないかを考察する。

以上のように、本論文は日本に原爆が投下された背景を明らかにした上で、「原爆神話」の元になったスティムソン論文誕生の過程を考察する。そして、アメリカの歴史教科書やエノラ・ゲイ展論争、オリバー・ストーンによるドキュメンタリーを通して、戦後から現在に至るまで、神話がどのような影響力を持ったのか、また人々の神話に対する考え方は変化しているのかどうかを検討する。

第一章 原爆投下と「原爆神話」の誕生

「原爆神話」はどのように生まれたのだろうか。第一章では、原爆投下が決定された背景と「原爆神話」が誕生した過程を論じる。広島と長崎に原爆が投下された2年後の1947年2月、投下当時の陸軍長官であるスティムソンによって論文「原爆投下の決定」が発表された。原爆投下に関する背景や理由などが記されているこの論文は、複数のメディアで取り上げられ大きな反響を呼んだ。特に注目されたのは日本に原爆を投下した理由である。ここで示された早期終戦・人命救済説はアメリカ国内に広く浸透し、「原爆神話」として影響力を持ち続けることになる。

そこで本章では、原爆開発が開始されてから日本に投下されるまでの経緯を明らかにした上で、「原爆神話」の誕生、いわゆるスティムソン論文の形成過程を明らかにする。

第一節 原爆投下の背景

1945年8月6日、広島に原子爆弾が投下された。その3日後の8月9日、長崎に二発目の原爆が投下された。原爆は2つの都市に甚大な被害をもたらし、日米両国だけでなく世界全体の歴史に大きな影を落とすことになる。本節では、原爆投下決定の背景とアメリカが原爆を投下した理由を明らかにする。

そもそもアメリカが原爆開発に着手したのは、ドイツ・ナチスによって核開発が行われる恐れがあると判明したためである。アメリカによる原爆開発は「マンハッタン計画」と呼ばれ、1941年以降、開発や管理に関する委員会など様々な機関が創設された。そして、1945年7月16日には、ニューメキシコ州アラモゴードで初の核実験が行われた。

核実験前の1944年9月には、英国との間で核開発に関する協力と管理について合意したハイパーク協定が結ばれ、このときアメリカは日本に対して原爆を使用することをほぼ決定していた。1945年5月に発足した「暫定委員会」（原爆開発に関わる問題を検討する諮問機関）においても、スティムソン陸軍長官をはじめとする数人の政府高官は、投下すべきかどうかよりも原爆の影響や日本を降伏させるための方法を議論していた（Walker 2005年=2008年, 36頁; 木村・Kuznick 2010年, 18頁）。

ドイツ降伏後の1945年7月17日には戦後処理に関する決定を行うポツダム会談がアメリカ、イギリス、ソ連代表によって開かれた。当初この会談は7月1日に始まる予定だったが、アメリカが、科学者たちに核実験の準備をさせるため、会談の開催時期を意図的に延期したのだ。核実験が成功し原爆が完成すれば、ソ連の参戦がなくとも、日本を降伏させられると考えたからである。会談が始まる前日の7月16日には、トルーマン大統領のもとに核実験成功の知らせが届き、あとは原爆投下の準備が整う日を待つだけとなった。そして7月25日、トルーマンはマンハッタン計画を指揮したレズリー・グローヴズ将軍が起草した原爆投下指令案を承認し、日本に対して原爆を投下する事実上の決定を行った。そ

の翌日、日本政府に対して無条件降伏を求めるポツダム宣言が発表されたが、その中に日本人に対して「原爆やソ連参戦が差し迫っていること」を伝える文言はなかった。これに対し、日本政府はしばらくの間沈黙を守ることを決定し、明確な意思表示を避けた。この時の日本政府は主戦派と和平派による内部分裂が深まっており、全く機能していないに等しかったのである（Walker 2005 年=2008 年, 112-113 頁）。

日本政府からの明確な回答がなかったにも関わらず、「準備が整い次第使用する」と決めていたアメリカは8月6日に広島、9日に長崎へ原子爆弾を投下した。そして長崎に原爆が投下された6日後の8月15日に、日本はポツダム宣言を受諾し降伏することとなった。

アメリカが原爆を投下した理由に関しては、アメリカ政府の公式見解として定着した早期終戦・人命救済説の他に、ソ連抑止説、人体実験説など様々な意見が出され、現在もお議論が続いている（木村・Kuznick 2010 年, 11 頁）。さらに、「ルーズベルト前政権から引き継いだ政策をそのまま『遂行』した、すなわち『決定』したのではなく『回避』しなかっただけ（木村・Kuznick 2010 年, 8 頁）」という説もある。

序章で述べたように、アメリカ国内で広く浸透している早期終戦・人命救済説は、学説としてはすでに説得力を失っている。それを裏付ける事実として、以下のようなことが挙げられる。一つは、トルーマン大統領が、日本上陸作戦が行われた場合の推定犠牲者数が、スティムソン論文で示された「100 万人」よりはるかに少なくすむという報告を受けていたことである。1945 年 6 月のホワイトハウスの会議資料にある数値も「2 万人以内」であり、早期終戦・人命救済説での「100 万人」がいかに誇張を含んでいたかがわかる（木村・Kuznick 2010 年, 19 頁）。また、アメリカ政府は、日本への通信傍受により、1945 年 7 月には日本政府が和平へ向けて動いていること、さらに和平への障害が天皇制の存続であることを知っていたにも関わらず、ポツダム宣言から天皇制の保障を示唆する文言を意図的に削除した。歴史学者でロシア史が専門の長谷川毅（2006 年）によると、トルーマンや国務長官ジェームズ・バーンズは、スティムソンら政府高官から天皇制を保障する文言を復活させるよう嘆願された際も、これを拒否した。原爆使用を回避して戦争を早期に終結させる道を取らなかったのである。さらに、ウォーカー（2008 年）によると、ポツダム会談の中で「（ソ連代表の）スターリンがソヴィエト参戦をアメリカが公式に要請するよう求めた際、トルーマンはこれをはぐらかした（105 頁）」。

アメリカは当初、ポツダム会談でソ連の対日参戦を確実にすることを目的としていた。しかし、会談前日に原爆実験が成功したため、アメリカはソ連参戦の必要性を見直し、最終的にソ連をポツダム宣言作成の話し合いから閉め出すことに決めたのだ。もしポツダム宣言にソ連の署名があれば、日本にソ連参戦の合図を送ることになり、原爆を使用する前に日本が降伏する可能性があったからである（長谷川 2006 年, 260 頁, 274 頁）。このように、アメリカがポツダム宣言発表前に原爆投下を決定していたことなど、これまでの研究で明らかになった事実を考慮すれば、早期終戦・人命救済説が学術的に支持できるものではないことがわかる。

以上のように、原爆開発が開始された 1941 年以降、政府高官たちは原爆投下の是非につ

いて熟考することなく、原爆を日本に対して使用することは既定の決定事項としていた。そして、投下理由は歴史学者たちによって様々な説が提唱されている。現在では説得力を失っている早期終戦・人命救済説だが、終戦直後のアメリカ社会においては政府の見解として発表されたこともあり、主流の理解となっていた。つまり、この説が「原爆神話」となったのである。では、「原爆神話」はどのようにして生まれたのだろうか。

第二節 スティムソン論文の誕生

「原爆神話」の元になったスティムソン論文とは一体何なのか。誰がどのような過程で作り上げたのか。本節では、多くの人から賞賛を受け、原爆投下に対するアメリカ政府の公式見解となったスティムソン論文が作成された背景とその過程を考察していく。

終戦直後のアメリカでは原爆投下を支持する意見が世論の大半を占めた。しかし一方で、少数ではあるが、原爆が無差別に民間人の命を奪ったことなどを理由に、原爆投下に対して批判の声を投げかける人々も存在した。また、合衆国戦略爆撃調査団は1946年7月刊行の最終報告書において、「原爆投下、ソヴィエトの対日参戦、あるいはアメリカの九州上陸作戦がなくとも、日本は降伏したであろうと結論づけた」のである（Walker 2005年=2008年, 147-148頁）。

このような批判や原爆投下が持つ意味を再検討する動きに対して危機感を抱き、何らかの措置を取る必要があると考えたのが、マンハッタン計画で重要な役割を担ったハーバード大学学長のジェイムズ・コナントである。彼は原爆投下に関する論文を発表するべきだと考え、それを担う人物として、原爆開発から投下まですべての行程に深く関わった当時の陸軍長官ヘンリー・スティムソンを選んだ（Walker 2005年=2008年, 149頁）。

実際に論文の執筆に取り組んだのは、スティムソンと親しく、長年彼の特別顧問を務めたH・バンディの息子M・バンディである。アメリカの政治・外交が専門の文化学園大学教授の中沢志保（2014年）は、M・バンディはスティムソンの他に、コナントやレズリー・グローヴズ將軍ら5人の政府高官の支援を得て執筆作業を行ったとし、論文は最終的にコナントが修正を加え完成に至ったとしている（中沢 2014年, 214頁）。

スティムソン論文には、マンハッタン計画、暫定委員会によるトルーマンへの提案や対日政策、そして原爆使用に関する説明などが含まれている。この論文の最も重要な点は、原爆は戦争を早期に終結させ100万人以上のアメリカ兵の命を救ったと論じているところである。「100万人」という数値の根拠が明らかではないにも関わらず、原爆使用の理由として挙げられたこの早期終戦・人命救済説は、アメリカ国民の原爆に対する考え方に大きな影響を及ぼすことになる（中沢 2014年, 216-221頁）。

スティムソンによる論文「原爆投下の決定」は『ハーパーズ』誌の1947年2月号に掲載された。NHK取材班（1996年）によると、『『ニューヨーク・タイムズ』はこれを一面で取り上げ、その記事は『公共への高い重要性』があるとして、無料で国内のさまざまな新

聞に掲載されることになった(127頁)」。原爆投下の背景や一般の人々には知ることのできなかつた事実が、スティムソンならではの重みのある言葉で表現されたことにより、論文は多くの人から賞賛を受けたのであった。さらに、原爆に関する説明は、投下を正当化するためにトルーマンをはじめ多くの政府高官によって引用された。そして結果として、疑問を投げかける余地のない「絶対的な声明(Walker 2005年=2008年, 154頁)」としてアメリカ国内に浸透していくのであった。

このように、論文「原爆投下の決定」は原爆投下に対する批判を抑えるためにコナントがスティムソンに書かせたものであり、結果的にアメリカの政府高官たちの予想を超えるほどの反響を呼んだ。そして論文で示された早期終戦・人命救済説は、「原爆神話」として現在まで影響力を持ち続けている。

これまでみてきたように、当時のアメリカの政府高官たちは、原爆に関する会議の中で、投下を回避する道を検討することなく、原爆の影響や日本を降伏させる方法だけに焦点を当て議論していた。投下の理由に関しても、当時の政治状況、外交状況の複雑さにより一つに絞ることは容易ではなく、現在も様々な議論がなされている。「原爆神話」をつくったスティムソン論文は、当時の政府の思惑が形となって表れたものであり、当初の彼らの予想を超える反響を呼んだ。そして、序章で示したように、近年の調査においても原爆投下を支持するアメリカ人が過半数を占めている事実は、「原爆神話」の影響力の大きさを物語っている。それでは、戦後、スティムソン論文が発表されてから現在に至るまで、「神話」はどの程度の影響力をもったのだろうか。この問題を検証するために、次章ではまず、1950年代以降のアメリカの歴史教科書を参考に、原爆投下に関する記述を考察する。

第二章 アメリカの歴史教科書から見る「原爆神話」の影響

前章でみたように、原爆投下の理由に関しては様々な説が提唱されており、議論が分かれているが、スティムソン論文は数人の政府高官によって作られたものであり、その中の早期終戦・人命救済説はメディアの力もあって原爆投下の理由としてアメリカ国内に広く浸透していった。

では、スティムソン論文が発表された 1947 年以降、「原爆神話」はどのような影響力を持ったのか。本章では、アメリカの歴史教科書における原爆投下の記述を検証し、投下理由に関してどのような説明がされているのか、また神話に関連する記述があるのかを考察する。なお、教科書は、1950 年代から 1970 年代と、記述に大きな変化がみられる 1980 年代から 2000 年代の 2 つに分けて検証する。

教科書記述を考察する前に触れておきたいのが、アメリカの教育制度である。アメリカには日本のように教科書の検定制度はなく、出版社が自由に教科書を作ることができるため、内容も多種多様である。さらに全国共通の指導要領もないため、各州、各学校で教科書を選定、採択することになっている（大島 2005 年, 78 頁）。以上のことを踏まえた上で、本章では、アメリカの歴史教科書における原爆投下の記述を年代別に考察する。

第一節 1950 年代から 1970 年代のアメリカ歴史教科書

1947 年に発表された論文「原爆投下の決定」は、多くの人から賞賛を受け、原爆投下に対するアメリカ政府の公式見解として広く浸透していった。では、「原爆神話」の影響はアメリカの多くの子どもたちが手にする歴史教科書にも表れているのだろうか。本節では、1950 年代から 1970 年代の歴史教科書における原爆投下の記述を検証し、「原爆神話」の影響力を明らかにする。

はじめに、1950 年代の歴史教科書における原爆投下の記述を検証する。教育学が専門の上林喜久子（1977 年）は、1950 年代初期の教科書における原爆の投下理由として、「もし米軍が日本本土に上陸した場合失われるかもしれない数百万のアメリカ兵士の生命を救い、かつ降伏をはやめた（42 頁）」との記述があると述べている。このように、1950 年代の教科書には、原爆の投下理由として、スティムソン論文で示された早期終戦・人命救済説とほぼ同じ内容のことが書かれている。日本上陸作戦が行われた場合の予想される死傷者数が、スティムソン論文で提示された数値とは異なるものの、アメリカ政府の公式見解をそのまま反映したような説明がされていることがわかる。

次に、1966 年版の高校用歴史教科書には以下のような記述がある。

原爆投下を命じるに際して、トルーマン大統領はいかに重大な決断を下したかを十分に理解していた。この決定は日本を降伏させる最後の手段として下されたのである。

これによって数十万人のアメリカ兵の命が救われたのである。(Rise, 1966 年, 高濱 2003 年, 38 頁より引用)

ここでは、原爆を「日本を降伏させる最後の手段」と位置付けている。また、ここでの数値も論文で示されたものとは異なるが、原爆によって、日本上陸作戦が行われた場合に犠牲になるかもしれない「数十万人」の命が救われたと断定している。一方、上林(1977 年)によると、1960 年代以降の教科書は、原爆投下の背景だけでなく、投下直後の惨状や後遺症の問題にも触れるようになった。

しかし、1977 年版の歴史教科書 *The Great Republic* では、それまでの流れとは異なり、原爆投下理由としての早期終戦・人命救済説の記述はない。以下のように、ただ事実関係が淡々と記されているだけである。

軍事顧問たちや民間のアドバイザーたちが一致して新大統領 [ハリー・トルーマン] に日本に対して原爆を使用するように助言し、大統領はそれに同意した。8 月 6 日、一発の原子爆弾が広島市に投下され、(中略) それから 3 日後、長崎に 2 発目の原爆が落とされた。(The Great Republic, 1977 年, 高濱 2003 年, 38 頁より引用)

このように、1970 年代の教科書は、原爆投下の事実関係を簡潔に説明するだけで、投下理由に関する記述はない。また、上林(1977 年)によると、1970 年以降の教科書には、アメリカの科学者たちによる投下への賛否の意見が記述されるようになった。つまり、原爆投下の正当性や神話を強調せずに、様々な視点から原爆投下を捉える記述へと変化したのである。

1950 年代と 1960 年代の歴史教科書には、原爆投下の理由として早期終戦・人命救済説とほぼ同じ内容の記述があるほか、原爆投下を正当化するような表現があることがわかる。一方で、1970 年代の教科書には直接的な早期終戦・人命救済説の記述はなく、原爆による後遺症の問題や、投下に対する賛否の意見を掲載するなど、多角的に原爆を捉える姿勢が表れている。原爆投下の正当性に触れていない点も 1950 年代と 1960 年代の教科書とは異なっており、歴史教科書における原爆投下の記述が少しずつ変化していることがわかる。

第二節 1980 年代から 2000 年代のアメリカ歴史教科書

1950 年代、1960 年代の教科書には、「原爆神話」の元になった早期終戦・人命救済説に関連する内容がはっきりと記述されている。しかし、1970 年代の教科書は、事実関係や原爆による被害などを重視した記述が目立ち、歴史教科書における原爆投下の記述に変化がみられることがわかった。では、1980 年代以降の教科書には原爆投下に関してどのような記述があるのだろうか。

1986年版の歴史教科書では、1970年代の教科書と同じように、本文中に投下理由に関する詳細な記述はない。一方で、新たに本文のあとに、生徒へ向けた原爆投下に関する質問の項目が追加されるようになった。戦争終結のために原爆は必要であったか、また当時原爆の他に戦争を終結させる選択肢はなかったかなど、子どもたちに自ら考えさせるような質問が数多く設定されている（高濱 2003年, 39-41頁）。

1995年版の中学校用歴史教科書には、「彼〔トルーマン大統領〕は戦争を早急に終わらせたいと望んでいた（『アメリカの物語』,1994年, 越田 2006年, 219頁より引用）」という記述がある。これは、早期終戦に関わる表現ではあるが、彼の考えを投下の直接的な理由として記述しているわけではない。また、同教科書においては、上述の内容のほかに投下理由に関する記述はなく、ただ原爆投下から終戦にいたるまでの経緯を示しているだけである。

1998年版の高校用歴史教科書には、ハリー・トルーマン大統領の発言を用いて客観的に彼の原爆投下に対する考えが記述されている。

トルーマン大統領は原爆投下は正当であると信じていた。「原爆投下は戦争を終結させ、何百万人の生命を救った」（『自由国家の歴史』,1998年, 越田 2006年, 219頁より引用）

ここで示されたのは、まさにスティムソン論文に書かれた早期終戦・人命救済説である。しかし、トルーマンの発言をそのまま引用しているだけで、投下理由を早期終戦・人命救済説に断定したり、原爆投下を正当化しているわけではないことがわかる。

さらに1999年版の高校用歴史教科書では、投下理由を一つに断定せず、以下のようにいくつかの可能性を提示している。

第一に彼は、アメリカ人と日本人の双方におびただしい犠牲者が出るのが予想される侵攻がなければ、日本は降伏しないであろうと確信していた。さらに、合衆国とソ連のあいだで高まりつつあった不穏な情勢も彼の原爆投下決定に影響を与えたとも想像できる。（『世界歴史—今日までのつながり』,1999年, 越田 2006年, 62頁より引用）

この教科書では、それまでにはなかった当時のアメリカとソ連の関係に言及し、原爆投下決定にソ連の存在が関係していたのではないかという推測を盛り込んでいる。

そして早期終戦・人命救済説以外の説については、これ以降の教科書にもたびたび登場することになる。例えば、2002年版の歴史教科書『ページェント』は、歴史学者ガー・アルペロビッツの論評を用いて、投下の理由を「ソ連を威嚇してアメリカの意思に服させるため（『ページェント』,2002年, 越田 2006年, 222頁より引用）」と記述している。また、原爆投下を批判する人々の中に、人種差別の要素があるのではないかとの意見を持つ者もいたという記述もある（越田 2006年, 222頁）。

以上のように、1970年代に続いて1980年代以降もアメリカの歴史教科書の内容は少しずつ変化していることがわかる。早期終戦・人命救済説を示す直接的な表現はなく、原爆投下の必要性を子どもたちに考えさせる質問や、ソ連抑止説などその他の説を取り入れる教科書が多く見られるようになった。

本章では、1950年代から2000年代までのアメリカの歴史教科書における原爆投下の記述を取り上げた。そして「原爆神話」の元になった早期終戦・人命救済説に関する記述は1950年代と1960年代の教科書に最も顕著に表れていることがわかった。そのためこの時代における「原爆神話」の影響力は1947年の論文発表当時と変わることなく強かったと言える。しかし、教科書の内容は1970年代から少しずつ変化していき、1990年代以降は投下理由を一つに断定することなく、様々な意見が提示されるようになった。神話を支持しない学術的研究の成果が教育にも反映されるようになったのである。このように、アメリカ政府の公式見解を強調したり、一方的に教え込む姿勢は見られず、子どもたちに自由に考えさせる機会を与えるようになったことがわかった。以上のことから、「原爆神話」は、主に1970年代以降の教育界においては絶大な影響力を変わらず持ち続けているとは言い難い。このような状況のなかで、「原爆神話」を再考する動きが出た。これに対してアメリカ国民はどのような反応をするのだろうか。次章では、神話再考の動きをきっかけに巻き起こった1995年のエノラ・ゲイ展論争を検証し、「原爆神話」の影響力と優位性を明らかにする。

第三章 エノラ・ゲイ展論争から見る「神話」再考の動き

前章では、1950年代から2000年代の歴史教科書における原爆投下の記述を検証した。記述は時代とともに変化していき、投下理由としての早期終戦・人命救済説も次第に強調されなくなっていくことがわかった。教育界において「原爆神話」が強い影響力を持ち続けているわけではないことと呼応するかのようになり、神話を再考する動きが出た。それはエノラ・ゲイ展論争として知られている。そのような時、アメリカ国民はどのような反応をするのだろうか。本章では、1995年のエノラ・ゲイ展論争の概要と、神話再考の動きに対してメディアや一般の人々がどのような反応を見せたのかを検証した上で、「原爆神話」が持つ影響力と優位性を明らかにする。

第一節 エノラ・ゲイ展論争とは

エノラ・ゲイ展とは、アメリカの首都ワシントン D.C.にある国立のスミソニアン協会傘下の航空宇宙博物館が1995年に開催した展覧会のことである。では、このエノラ・ゲイ展ではどのような展示が計画されていたのか。また、なぜこの展覧会が論争にまで発展したのか。本節ではまず、エノラ・ゲイ展の概要と、企画から開催までの経緯を明らかにする。

広島に原子爆弾を投下した爆撃機であるエノラ・ゲイを主役とした展覧会を開催する計画が始まったのは1990年のことである。この計画の中心人物である当時のスミソニアン博物館の館長マーティン・ハーウィットは、館長就任時、*Washington Post* のインタビューで、「これからの博物館は、第二次世界大戦時の戦略爆撃のような議論を呼ぶテーマをもっと取り上げていきたい (Kastor 1988年 原文英語、訳は筆者)」と述べている。そのため、ハーウィット館長や博物館の学芸員たちは、ただ単にエノラ・ゲイを展示し、原爆投下の背景を伝える展覧会を開くつもりはなかった。アメリカの退役軍人たちの勇敢さに敬意を表しつつ、投下の正当性など議論が続く問題に関して学術的な再検討を行う展覧会を開くことを計画したのである。つまり、彼らが企画したエノラ・ゲイ展は、アメリカ国内で広く信じられていた「原爆神話」に対する挑戦を意味していた (斉藤 1995年, 24頁; Walker 2005年=2008年, 157頁)。

博物館の学芸員たちは1991年ごろから展覧会開催に向けた準備を開始した。彼らは原爆投下に関する膨大な資料を集めるだけでなく、原爆による被害の側面を展示するために広島・長崎から被爆遺品や資料を借り受けることにしたのである。そして1994年の初めには展覧会の第一次企画案が完成した。企画案は5部構成で、原爆投下決定の状況や原爆の輸送、そして爆心地の被害などが含まれている。その中で注目すべきなのが、第2部「原爆投下の決断」である。ソ連の存在が原爆投下決定にどれほどの影響をもたらしたのかや、「『原爆を投下しなかった場合、(日本への) 本土上陸作戦は避けられなかった』だろうか (Linenthal and Engelhardt 1996年=1998年, 38頁)」など、長年繰り返されてきた原

爆投下に関する議論が紹介されている。また、企画案は「原子力の破壊性と恐怖」といったこれまでとは異なる「暗い物語」に焦点を当てているのが特徴である。このようにハーウィット館長をはじめとする博物館の学芸員たちは、この展覧会を通して、観客が原爆投下に関して様々な解釈を持つことができればよいと考えていた(斉藤 1995年, 24頁; NHK取材班 1996年, 16-19頁; Linenthal and Engelhardt 1996年=1998年, 35-38頁)。

ところが、この計画は予定通りには進まなかった。ハーウィット館長らが作成した展示計画に対して多方面から批判が出たのである。計画に対する最初の批判は、空軍協会によるもので、1993年のことである。批判の具体的な内容は次節で触れるが、空軍協会の会員たちは「侵略者である日本に有利な意見を述べている」などと主張し、博物館側に企画案の修正を求めた。空軍協会が公の場で、エノラ・ゲイ展の計画を批判するようになると、メディアも彼らに同調し、徹底的に博物館を攻撃するようになった。メディアの多くは企画案の一部のみを引用し、視聴者に誤った情報を流し続けた。そのため、博物館に対する批判はさらに大きくなっていったのである(Linenthal and Engelhardt 1996年=1998年, 43頁, 50-55頁)。

結局、空軍協会をはじめとする団体やメディア、一般の人々からの批判と圧力を受けた博物館側は1994年から度々企画案の修正を余儀なくされ、結果的に当初の計画とは大幅に異なる展覧会が開かれることになった。広島や長崎から借り受けるはずだった被爆遺品や写真も徐々にその数が減らされ、最終的には展示自体の中止が決定した。この決定の約3ヶ月後の1995年5月に、ハーウィットは博物館の館長を辞任することになる。そして1995年6月に開かれた展覧会は、原爆投下決定に至る過程や、原爆の影響など被害の側面を展示に反映することなく、ただ単にエノラ・ゲイの一部を展示するだけの無味乾燥なものになったのである(NHK取材班 1996年, 22-23頁, 198頁)。

以上のように、エノラ・ゲイ展を企画したスミソニアン航空宇宙博物館は当初、原爆投下の正当性などの議論や原爆による被害の側面を展示し、観客が今までとは異なる視点で原爆投下について考えることができる場を作ろうとしていた。しかし、様々な圧力によって当初の展示計画通りに展覧会を開くことは不可能になった。退役軍人やメディア、さらに一般の人々が展覧会に対して凄まじい抵抗を見せたことにより、「原爆神話」を考え直す機会が失われたのである。

第二節 エノラ・ゲイ展に対する空軍協会・メディア・一般の人々の反応

スミソニアン航空宇宙博物館が企画したエノラ・ゲイ展は、当初の計画から展示内容が大幅に変更され、規模も縮小する形で開催された。その要因となったのが空軍協会やメディア、一般の人々による批判である。それは具体的にどのようなものだったのだろうか。本節では、「原爆神話」への挑戦に対する退役軍人やメディア、市民の反応を検証し、「原爆神話」の影響力を明らかにする。

スミソニアン航空宇宙博物館が作成した企画案を最初に批判したのは、前節でも述べたように空軍協会である。彼らは、企画案に日本が侵略者であったこと、また日本軍が行った残虐行為がきちんと説明されておらず、日本びいきでアメリカに厳しい内容であると主張した。しかし、彼らは企画案を十分に分析したわけではなかった。企画案の中から、一部のみを引用して、展示の趣旨を歪め、博物館は「非愛国的な施設」とであると批判し続けたのである。さらに、空軍協会や退役軍人会は、「原爆神話」をうまく利用しながら、メディアを通して原爆投下の正当性を強く主張した。これにより多くの退役軍人や一般の人々が博物館による神話再考に反対したのである（Linenthal and Engelhardt 1996 年=1998 年 42-43 頁；齊藤 1996 年, 135 頁）。

メディアによる報道も偏ったものであった。企画案をすべて読むことなく博物館を批判した記事がほとんどで、中立な立場で一般の人々に議論を促すようなメディアはほぼ存在しなかった。多くの新聞は、エノラ・ゲイ展の企画に携わった学芸員たちを「政治的公正主義のまぬけども」と呼んだり、企画案は「アメリカを中傷している」として博物館への批判を繰り返した（Linenthal and Engelhardt 1996 年=1998 年 58 頁）。また、ボストンで広く読まれている *The Boston Globe* において、論説委員ジェフ・ジャコビー（1994 年）は、「（日本本土への上陸作戦が実行されれば）50 万のアメリカ人と 200 万の日本人が命を失っただろう（原文英語、訳は筆者）」と述べ、原爆が投下されなければ、戦争はもっと長引いたと主張した。このほかにも、*Washington Post* では、「展示は、原爆が何十万もの日本人、アメリカ人を救ったという事実を重視すべきである（Ringle 1994 年）」など、「原爆神話」を示す主張を繰り返しながら博物館を批判する新聞は数多く見られた。

企画案に対する批判の声は退役軍人や戦争を経験した人々からも上がり、博物館には抗議の手紙が殺到した。また、前述した新聞などのメディアがこの問題を大きく取り上げたことから、新聞などへ投書を寄せる人々も多くいた。そのほとんどが企画案を批判するものであった。スミソニアン協会の会員であり、戦争捕虜だった過去を持つ男性は、博物館に抗議の手紙を送った人々のうちの一人である。博物館を批判した人々取材した NHK 取材班（1996 年）によると、彼は、博物館が「アメリカを侵略者、そして日本人を犠牲者のように見せようとしている（91 頁）」ように思えたと述べている。また彼はインタビューの中で、「原爆は戦争終結を早めた（92 頁）」とはっきり発言している。さらに、1945 年当時、B29 の戦闘員として戦闘に出撃する予定だった男性も、博物館に対して批判的な考えを持っており、原爆は「最小限の消耗兵員数で戦争を終わらせる（NHK 取材班 1996 年, 152 頁）」ために使用されたのだと主張している。

空軍協会やメディア、そして上述のインタビューに答えた元軍人など戦争を経験した人々だけでなく、多くの一般の人々も博物館の企画に対して批判的な反応を見せた。彼らから出た意見として、「日本人が行った残虐行為を説明していない」や「真珠湾で起きたことを軽く扱い、原爆の被害だけを強調している」などがある。博物館を批判する際に「真珠湾」の事を取り上げる人は多く、彼らは、アメリカの博物館が自国の立場を主張せず

に日本に同情的な展示をしようと考えたことに不快感を示したのである。また、アメリカ政府の公式見解と同じように、原爆は日本とアメリカ両国間で多くの生命を救ったと考える人や、戦争を早く終わらせるために原爆が使用されたと考える人も多い。これは、アメリカ国内で影響力を持っていた空軍協会が、神話を利用しながらメディアを通して投下の正当性を主張していたことが大きく影響していると言える。(NHK取材班 1996年, 31頁, 43頁, 47頁, 83頁, 152頁; 斉藤 1996年, 63頁, 135頁)。

このように、空軍協会やメディア、一般の人々から出た批判は、展覧会はアメリカに厳しく、原爆投下の被害の展示など日本側の視点が多すぎるといえるものがほとんどであった。また、アメリカで影響力を持っていた空軍協会による痛烈な批判がメディアでそのまま報道されたため、多くの退役軍人や一般の人々が神話再考反対に流れていったことがわかった。

本章では神話再考の動きが出たエノラ・ゲイ展とその論争について取り上げた。そこから、日本びいきで「アメリカ的でない」展覧会は、特に、退役軍人や戦争を経験した人々に全く受け入れられないことが明らかになった。またこの論争から、アメリカにおいて軍の影響力が強大であることがわかった。彼らが展示の趣旨を歪めて批判を繰り返したことで、多くの退役軍人や一般の人々が神話再考反対へと向かったからである。さらに、博物館を批判した人々が、早期終戦・人命救済説を示す内容を主張している点から、依然として「原爆神話」がアメリカでは広く信じられていることがわかった。神話をすでに説得力のないものとして位置付ける大多数の歴史学者や教育界の流れと、一般の人々の意識の間には大きな隔りがあるのだ。では、神話再考よりさらに踏み込んで、「原爆神話」につながった早期終戦・人命救済説が全くの嘘であると発表された時、アメリカ国民はどのような反応をするのだろうか。次章では、神話を否定したオリバー・ストーン監督によるドキュメンタリーを分析し、それに対する人々の反応を検証した上で、「原爆神話」の優位性や影響力に変化がないかを明らかにする。

第四章 現代における「神話」への挑戦

前章では、1990年代前半に起こったエノラ・ゲイ展論争を検証した。「原爆神話」を再考しようとする試みは結局、多方面からの批判により実現しなかった。展示計画を作成したスミソニアン博物館に対して批判を繰り返した人の多くは、退役軍人やその家族であった。しかし立場に関係なく、早期終戦・人命救済説を用いて博物館を批判する人も多くいたことから、依然としてアメリカでは「原爆神話」が広く信じられていることがわかった。では、この早期終戦・人命救済説が間違っていると発表された時、アメリカ国民はどのように反応するのだろうか。本章では、「原爆神話」への挑戦とも言えるオリバー・ストーン監督によるドキュメンタリーとそれに対する人々の反応を検証した上で、現代において、「原爆神話」への考え方に変化がないかを明らかにする。

第一節 オリバー・ストーンと *The Untold History of the United States*

The Untold History of the United States とは、アメリカの映画監督オリバー・ストーンによって2012年に制作されたドキュメンタリーである。このドキュメンタリーでストーン監督は視聴者に何を伝えようとしたのだろうか。本節ではまず、*The Untold History of the United States* の概要を明らかにする。

The Untold History of the United States の内容を述べる前に、このドキュメンタリーを制作したオリバー・ストーンについて触れておきたい。ストーン監督のホームページである *The Oliver Stone Experience* によると、1946年、ニューヨークに生まれた彼はイェール大学を中退後、ベトナムに赴き教師の職に就いている。そして帰国後の1967年にはベトナム戦争に従軍し、除隊後はニューヨーク大学で映画制作を学んでいる。彼は、*Born on the Fourth of July* や *JFK* など、アメリカ現代史と深く関わりのある作品を数多く世に送り出してきたアメリカを代表する社会派の映画監督である (Oliver Stone 2012)。

The Untold History of the United States は1930年代からオバマ政権下の現在に至るまでのアメリカの歴史をストーン監督独自の視点で描いたドキュメンタリーシリーズである。ストーン監督は、ドキュメンタリーを作った意図として、「目の前のことのみにとらわれず歴史に触れてほしい。そして今まで誰も考えなかったやり方でアメリカという国の存在意義を取り戻したい」と述べている。このドキュメンタリーシリーズは、日本では2013年にNHK-BS1で全10回に分けて放送され、大きな反響を呼んだ。そのシリーズの中の一つが本章で取り上げる *The Bomb* (原爆投下) である(「BS世界のドキュメンタリーで放送する『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』全10回の見どころ」, @動画, 2013年)。

The Bomb は、それまで多くのアメリカ国民が信じてきた早期終戦・人命救済説を真っ向から否定し、アメリカが原爆を投下したのはソ連の影響力を抑えるためであり、軍事的な

意義や正当性などないと断言する内容である。ドキュメンタリーでは、アメリカ人の日本人に対する人種的偏見や、原爆使用に反対した科学者たちの証言、そして原爆投下決定に関わるアメリカ政府の指導者たちの言動が詳細に描かれている（「オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史 第3回 原爆投下～アメリカの途方もなく陰険な企み」, @動画, 2013年）。以下では、ドキュメンタリーの概要について詳しく触れていく。なお、概要は、「オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史 第3回 原爆投下～アメリカの途方もなく陰険な企み」(@動画, 2013年)を参照している。

ドキュメンタリーは、原爆はソ連の影響力を弱めるために投下されたという結論を導くために、その根拠として様々な政府関係者の証言や資料を引用している。その一つの例が、原爆を使用すべきではないという科学者たちの警告に対する当時の国務長官ジェームズ・バーンズの反応である。トルーマン大統領への警告を阻まれた科学者たちによると、バーンズは原爆を保有することでヨーロッパにおけるソ連の影響力を抑えられると考えていた。これは、アメリカ政府がソ連を敵視していた証拠の一つと言える。また、1945年6月、陸軍参謀総長のジョージ・マーシャルはトルーマンに日本本土へ上陸した場合の死傷者数が「3万1千人を超えることはない」と報告しており、ここでの数値は神話の100万人とかけ離れていることがわかる。

さらにドキュメンタリーは、日本が和平に向けソ連に仲介を求めることを決定した1945年5月、アメリカはすでに日本の通信を傍受しており、日本戦の終わりが近いことを知っていたと指摘している。そのためアメリカの指導者の中からは、日本が降伏する上で唯一の障害である天皇制の存続を認め、速やかに戦争終結を促すべきであるとの声が上がった。しかし、これに対しても国務長官バーンズは、天皇制を認めれば大統領の政治に致命的なダメージをもたらすと主張し、トルーマンもそれに同意した。そして、アメリカは1945年7月、英国、ソ連とともにポツダム会談を開き、天皇制について一切保障しないポツダム宣言を日本に突き付けたのである。この時のソ連には対日参戦を再度保障する用意があり、宣言にも署名する予定でいた。ところが、発表された宣言にはソ連の署名はなく、これも日本にソ連の対日参戦の合図を送らないようにするアメリカの企みであったと番組は指摘している。結局、降伏条件を変更するなど、戦争終結を早める機会があったにもかかわらず、トルーマンはそれを実行しようとしなかった。そして結果的に、広島と長崎に2発の原爆が投下され甚大な被害をもたらすこととなったのである。

番組後半では、2発の原爆投下ではなく、ソ連の満州侵攻が日本を降伏させる決定打になったと語られている。その証拠の一つとして、終戦直後にアメリカの陸軍省が行った日本の政府要人への調査の中で、彼らから原爆投下に対する言及がなかった点が挙げられている。実際にこの調査でアメリカ陸軍省は、「結局原爆投下は、戦争終結の口実に過ぎない。しかしソ連の参戦で日本が降伏したのはほぼ間違いない」と結論づけている。原爆投下というアメリカによるソ連への挑戦は、その後米ソ冷戦引き起こし、世界は二分されたのである (Stone and Kuznick 2012=2013, p. 312-359)。

以上のように、映画監督オリバー・ストーンは自身が制作したドキュメンタリーの中で、アメリカは原爆を投下することなく日本を降伏させ戦争終結を早めることができたにも関わらず、その手段を取らなかったと指摘している。そして、当時の指導者たちの証言や最新の資料を引用しながら、原爆投下は早期終戦・人命救済のためではなく、ソ連を牽制するためであったという原爆投下に対する独自の考え方を展開した。

第二節 ドキュメンタリーに対するメディアと一般の人々の反応

2012年制作のドキュメンタリー*The Untold History of the United States*でオリバー・ストーン監督は、アメリカが原爆を投下した理由をソ連の影響力を抑えるためだと結論付け、それまでアメリカに浸透していた早期終戦・人命救済説を完全に否定した。では、このドキュメンタリーに対してメディアや一般の人々はどのような反応を見せたのか。本節では、インターネット上に投稿されたレビューなどを参考に、ドキュメンタリーに対するメディアと一般の人々の反応を検証した上で、「原爆神話」への考え方に変化がないかを明らかにする。

*The Untold History of the United States*は2012年、アメリカにおいてCBSの子会社である*Showtime*で放送された。2013年8月に来日した際、ストーン監督は記者会見の場で、ドキュメンタリーに対するアメリカの主要メディアの反応は冷たかったと語り、次のように述べている。

番組はアメリカの主要なネットワークでは一度も放送されず、主要メディアには無視された。主要メディアはアメリカ寄りでアメリカのスポンサーの方を向いている。アメリカ批判は企業の興味を引かないのだ（中山 2013年）

このように、世論の形成に大きな影響を及ぼすメディアが、アメリカにとって都合の悪い内容を表に出さないという点は、前章で扱ったエノラ・ゲイ展論争の時と同じである。ストーン監督が述べた原因の他に、メディアはこのドキュメンタリーでは視聴率は取れないと考えたため放送しなかったとも考えられる。

では、ドキュメンタリーに触れた一般の人々の反応はどうだろうか。大手通販サイトamazonで販売されている*The Untold History of the United States*のDVDの紹介ページには、1から5までの評価の点数とともに、275人の投稿者によるカスタマーレビューが掲載されている。そのうちの191人が満点である5点の評価をしており、高評価と言える4点と5点だけで全体の8割を占めている。これらの中から高評価と低評価のレビューを1つずつ取り上げ、ドキュメンタリーに対する一般の人々の反応を検証する。

最初に取り上げるレビューの投稿者は、ドキュメンタリーに対して満点の5点の評価をつけている。この投稿者のその他のレビューには、ベトナム戦争を扱った『フルメタルジ

ャケット』の監督スタンリー・キューブリックの作品集などがあり、新旧問わず評価の高い映像作品を鑑賞していることがわかる。ドキュメンタリーに関して、この投稿者は、教育に取り入れるべきだと主張している。ただし、このレビューはドキュメンタリー全体に対するものであり、*The Bomb* のみに対する意見ではない。

I hope History teachers can be brave and show this documentary in Jr. High Schools and High Schools.……The History books are so full of lies and the truth is sometimes too difficult to accept but I'd like to think there are some History teachers that have the guts to show this to their students. But it's also a must for all Americans to re-learn the True History Of the United States! (R.Rodriguez December 29, 2013)

このレビューの投稿者は、歴史に関する本は偽りだらけであり、真実は時に受け入れがたいものであると理解している。そして、中高生だけでなくすべてのアメリカ人がこの作品を見て、アメリカの本当の歴史を学び直すべきであると述べている。このレビューのように、中学校、高校で *The Untold history of the United States* を見せるべきだという意見や、すべてのアメリカ人に見てもらいたいという意見は数多く見られた。

次に取り上げるのは、1点の評価をつけた人物のレビューである。この人物は、Amazonの個人ページで、映画や歴史に興味があると述べており、100を超える映像作品にレビューを投稿している。また、政治に関する本や映像に対するレビューが多いのも特徴である。そしていくつかのレビューにおいて、リベラリズムを厳しく批判している点から、保守的な考えを持っていると考えられる。ドキュメンタリーに関するレビューは以下の通りである。

Japan started the damn war. The USA DID NOT. Crying over the use of the atomic bomb is a waste of time. (Rextrent July 18, 2014)

この人物は、戦争を始めたのはアメリカではなく日本であると強調し、日本に原爆が投下されたのはおかしいことではないとも受け取れるような主張をしている。

最後に取り上げるのは、映画情報サイトの IMDb に投稿されたレビューである。IMDb における評価の最高点は 10 点であり、2620 人がドキュメンタリーを評価している。全体の平均は 8.8 点で、こちらも高評価が多いと言える。以下のレビューの投稿者はドキュメンタリーに 2 点の評価をつけ、原爆投下に関する批判的な意見を述べている。

Stone stands on incredibly small estimates for American casualties during the planned invasion of Japan to discredit the decision to drop the bomb. (jpiaggione

December 29, 2012)

このレビューの投稿者は、日本上陸作戦の際のアメリカの推定死傷者数が低く見積もられていると主張し、ストーン監督が新しい事実に基づいて示したデータを否定した。ストーン監督が提示した数値を受け入れない点から、この人物は「原爆神話」で示された「100万人」もしくは政府高官たちによって宣伝された「50万人」や、「何十万人」という数を信じている可能性があると言える。

このように、*The Untold History of the United States* を高く評価する人が多い一方で、原爆投下の正当性を主張したり、新事実に基づいたデータを否定するなど、ドキュメンタリーの内容を全く受け入れない人もいることがわかる。それでも、ドキュメンタリーを手にした人々の多くが、「すべてのアメリカ人が見るべき」や「考え方が変わる」といったように、冷静に新しい事実を受け入れ、後世へ伝えていこうとする姿勢を見せた。その中でも、ドキュメンタリーを教育に取り入れるべきと考える人が多いことは注目に値する。多くの人に触れる教育は国民意識を形作るものの一つであり、そこに取り入れるということは、アメリカ全体の意識が変わる可能性があることを意味している。教育の重要性を取り上げた人々の中には、アメリカの意識を変えたいと考えている人がいるのかもしれない。

以上のように、本章では、オリバー・ストーン監督制作のドキュメンタリー *The Untold History of the United States* を取り上げた。ストーン監督は「原爆神話」を否定し、様々な資料を用いて、「アメリカが原爆を投下したのはソ連を牽制するため」という結論を導き出した。主要メディアがこれを取り上げなかったのは、国民がこのようなドキュメンタリーを求めていることを表しているとも言える。そして、原爆投下の正当性を主張したり、神話での数値とは異なる新しいデータを受け入れない人もいることがわかった。それでも、ドキュメンタリーに触れた大半の人々が、内容を高く評価し、このことを知らない人々や若い世代に伝えるべきであると主張している。少なくともこのドキュメンタリーを手にした人々は、「原爆神話」にとらわれることなく、ストーン監督が示した事実を受け入れている。そのため、「原爆神話」が現在もなお強い影響力を持ち続けているとは言えない。そして、少しずつではあるが、新しく確認された事実などが伝えられるようになってきたことで、人々の原爆投下に対する考え方は変化していると考えられる。

終章

「原爆神話」はどのように誕生したのか。そして、戦後から現在に至るまで神話はどのような影響力を持ったのか。それぞれの時代における神話の影響力を明らかにするため、本論文ではまず、アメリカの歴史教科書を参考に教育界における神話の位置づけを考察した。さらに、神話への挑戦と言えるエノラ・ゲイ展論争とドキュメンタリーを検証することによって、人々の原爆投下に対する考え方に変化がないかを明らかにした。

第一章では、原爆投下の背景と「原爆神話」の元になったスティムソン論文の誕生過程を考察した。アメリカ政府は1941年に原爆開発計画を開始し、1944年には投下対象を日本にすることを決定した。そして1945年7月のポツダム会談で日本に無条件降伏を求める宣言を発表したのち、日本政府からの明確な意思表示を待つことなく、2発の原爆を広島と長崎に投下した。戦後、原爆投下を疑問視する声が少なからず出てきたことを受け、原爆計画で重要な役割を担ったジェームズ・コナントが陸軍長官ヘンリー・スティムソンに書かせたものがスティムソン論文である。そして、論文の中で示された早期終戦・人命救済説は、メディアや政府高官によって繰り返し引用された。その結果、原爆投下の理由としてアメリカ国内に広く浸透していったことがわかった。

第二章では、アメリカの歴史教科書における原爆投下の記述を検証した。1950年代と1960年代の教科書には、原爆投下の理由として、「原爆神話」の元になった早期終戦・人命救済説を示す記述があることがわかった。一方で、1970年代から2000年代の教科書には、神話に基づく記述はほとんどなく、投下について生徒自身に考えさせる質問や、投下理由に関して提唱されている様々な説が紹介されるようになった。戦後20年ほどは教育界においても神話の影響力が強かったが、時代が進み新しい事実が確認されるようになると、教科書の記述も変化していったことがわかった。神話を押し付けることなく、子どもたちに様々な視点から原爆投下について考えさせるようになったと言える。

第三章では、神話再考の動きをきっかけに巻き起こったエノラ・ゲイ展論争を取り上げた。エノラ・ゲイ展を企画したスミソニアン博物館は、様々な資料を提示した上で、原爆投下について学術的な再検討を行うことを意図していた。ところが、多方面からの批判によって、その機会は失われた。博物館を特に強く批判したのが、退役軍人や空軍協会などである。彼らは、「原爆神話」を利用しながら、メディアで原爆投下の正当性を強く訴えたのだ。当時絶大な影響力を持っていた彼らの発言によって多くの一般市民が神話再考反対へと向かった。さらに、一般市民へのインタビューにおいて、批判者の多くが「原爆神話」を主張していることがわかった。エノラ・ゲイ展論争から、アメリカにおいて軍の力が強大であること、そして「原爆神話」が根強く生き続けていることが明らかになった。

第四章では、現代における「原爆神話」への挑戦であるオリバー・ストーン監督によるドキュメンタリーを取り上げた。ストーン監督はドキュメンタリーの中で当時の政府高官

たちの証言や新しく確認された事実を提示し、原爆投下は早期終戦・人命救済のためではなく、ソ連を牽制するためだったと結論づけた。そして、ドキュメンタリーに対する一般の人々の評価はおおむね高いことがわかった。一部の人々は内容を受け入れず厳しく批判しているが、ドキュメンタリーを見た多くの人々が、ストーン監督によって示された事実を柔軟に受け入れ、若い世代に伝えていく姿勢を見せている。

本論文では、戦後 64 年経った 2009 年でもアメリカにおいて原爆投下を支持する人が 6 割を超えているという事実に着目し、それに大きく関係しているであろう「原爆神話」をテーマとして取り上げた。序章でも述べたように、学術的研究における原爆投下への考え方が時代とともに変化しているのは明白である。つまり、新しく確認された事実によって「原爆神話」はすでに信頼性を失っているということだ。この研究成果と同調するように、教育界においても、神話を強調しない記述へと変化していった。スミソニアン博物館による神話再考はアメリカの軍の力が強かったため叶わなかったが、学芸員たちも学術的成果や教育界の流れに沿うように、それまでとは異なる試みをしたと言える。オリバー・ストーンによるドキュメンタリーも神話を崩すものであり、さらに、それを受け取る人々の反応はより柔軟で冷静なものへと変化している。本論文で取り上げた、アメリカ歴史教科書の記述の変化、エノラ・ゲイ展の展示計画、そしてストーン監督のドキュメンタリーは、時代ごとの研究で明らかになった様々な事実が反映されており、「原爆神話」を支持しない一つの流れとして捉えることができる。

以上のことから、戦後から現在に至るまでアメリカ全体が「原爆神話」に完全に染まっているわけではないと言える。教育界や学術的研究の流れ、そしてドキュメンタリーに対する一般の人々の反応から見ても、人々の原爆投下に対する考え方には変化の兆しが見える。ただし、国民全体が考え方を変えているとは言い難い。なぜなら、神話を否定したドキュメンタリーをどのくらいの人が見ていたかはわからないからである。また、エノラ・ゲイ展が事実上中止に追い込まれたために、人々が神話から脱却し、原爆投下に関して様々な解釈をもつ機会を失ったからである。今後ドキュメンタリーが主要なメディアで放送されたり、スミソニアン博物館が意図したような展覧会が開催されるなど、神話から脱却する試みが実現すれば、人々の考え方は変わるかもしれない。一方でエノラ・ゲイ展の時のように再び論争が起きる可能性も考えられる。いずれにしても、この研究を通して見えた小さな変化が、世論全体を大きく変えるほどのものかどうかは今後検討が必要である。

最後に、本論文では、「原爆神話」とは異なる結論を導き出した学術的研究の成果と詳細について詳しく触れることができなかつた。また、今回の研究では、エノラ・ゲイ展やドキュメンタリーに対して投書やレビューを書いた人々の意見のみにスポットを当てたため、その他の人々の考えを分析することができなかつた。今後の課題として、原爆投下というテーマに関心がない人を含め、より多くのアメリカ人の考えを調査することで、一人一人が原爆投下をどのように考えているか、またその考え方はこの先変化していくのか、研究を深める必要がある。

参考文献リスト

- 「BS世界のドキュメンタリーで放送する『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史』全10回の見どころ」. @動画. 2013年. < <http://www.at-douga.com/?p=7556#more-7556> > (アクセス日: 2014年12月8日)
- Engelhardt, Tom and Edward T. Linenthal. 1998年. 『戦争と正義—エノラ・ゲイ展論争から—』(島田三蔵訳) 朝日新聞社. (原書名: *History Wars: The Enola Gay and Other Battles for the American Past*. New York: Metropolitan Books, 1996)
- 長谷川毅. 2006年. 『暗闘: スターリン、トルーマンと日本降伏』 中央公論新社.
- Jacoby, Jeff. 1994. “Smithsonian drops a bomb in World War II exhibit.” *The Boston Globe*, 16 August.
- jpiaggione. 2012. “I have to agree with the other negative reviews.” IMDb. < <http://www.imdb.com/title/tt1494191/reviews?start=30> > (opened Jan. 4, 2015)
- 上林喜久子. 1977年. 「日米の高校用歴史教科書における記述の比較: 日本史におけるアメリカとアメリカ史における日本に関する記述について」『国際基督教大学学報』 20巻. 29-55頁.
- Kastor, Elizabeth. 1988. “At Air & Space, Ideas on the Wing; Director Martin Harwit, Taking The Museum in New Directions.” *The Washington Post*, 11 October.
- 木村朗・Kuznick. 2010年. 『広島・長崎への原爆投下再考—日米の視点—』 法律文化社.
- 越田稜. 2006年. 『アメリカの教科書に書かれた日本の戦争: アメリカ・カナダ・オーストラリア・パプアニューギニア・ブラジル・ペルー・パナマ』 梨の木舎.
- 中山栄子. 2013年. 『オリバー・ストーン監督「原爆投下、大統領の説明は全部嘘だった」』 田中龍作ジャーナル. (2013年8月18日) < <http://tanakaryusaku.jp/2013/08/0007743> > (アクセス日: 2014年11月5日)
- 中沢志保. 2014年. 『ヘンリー・スティムソンと「アメリカの世紀」』 シナノパブリッシングプレス.
- NHK取材班. 1996年. 『アメリカの中の原爆論争—戦後50年スミソニアン展示の波紋—』 ダイヤモンド社.
- 「オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史 第3回 原爆投下～アメリカの途方もなく陰険な企み」. @動画. 2013年. < <http://www.at-douga.com/?p=7570#more-7570> > (アクセス日: 2014年12月8日)
- 大島京子. 2005年. 「アメリカの歴史教科書: 『太平洋戦争』についての記述をめぐって」『日本教育学会大会研究発表要項』 64巻. 78-79頁.
- Rextrent. 2014. “Rewriting history to hate America.” amazon. < <http://www.amazon.com/Untold-History-United-States-Oliver/product-reviews/B00GYG8BKK/ref=c> >

m_cr_pr_btm_link_next_2?ie=UTF8&filterBy=addOneStar&pageNumber=2&showViewpoints=0&sortBy=byRankDescending > (opened Jan. 4, 2015)

Ringle, Ken. 1994. "A-Bomb Exhibit Plan Revamped; Smithsonian Acts To Defuse Criticism." *The Washington Post*, 30 August.

R.Rodriguez. "This is one of the most amazing Documentaries I've ever seen." amazon. 2013. < http://www.amazon.com/Untold-History-United-States-Oliver/product-reviews/B00GYG8BKK/ref=cm_cr_pr_btm_link_next_2?ie=UTF8&filterBy=addFiveStar&pageNumber=2&showViewpoints=0&sortBy=byRankDescending > (opened Jan. 4, 2015)

斉藤道雄. 1995年. 『原爆神話の五〇年』中央公論社.

Stone, Oliver. 2012. *The Oliver Stone Experience* < <http://www.oliverstone.com/> > (opened Dec. 12, 2014)

_____ and Peter Kuznick. 2013年. 『オリバー・ストーンが語るもうひとつのアメリカ史 1—2 つの世界大戦と原爆投下—』(大田直子・鍛原多恵子・梶山あゆみ・高橋璃子・吉田三知世訳) 早川書房. (原書名: *The Untold History of the United States*. New York: Gallery Books, 2012)

高濱賛. 2003年. 『アメリカの歴史教科書が教える日本の戦争』アスコム.

Walker, J Samuel. 2008年. 『原爆投下とトルーマン』(林義勝訳) 彩流社. (原書名: *Prompt and Utter Destruction: Truman and the Use of Atomic Bombs against Japan*. Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 2005)